



第九卷第九號

光陰を惜しむ可し

貝原益軒

梓弓あづまゆみはる立ちしより年の暮としくれ行くまで、射あるが如ごとくにおもほゆれば、時じつ日の疾とく過すぎ行くは止とどめあふす。むべも、としと名なづけ、又また時ときと云いへるならん。されば光陰くわういんの如ごとく時節じせつ流ながるゝが如ごとしと云いへるは設まうけたる言げんに非あらず。

老おいぢかに向むかへば猶なほ更さらに年月ねんげつの早はやく過すぐるこゝ、恰あたかと飛とぶが如ごとし。あとなかへり見みれば、五十いそ齡れいを過すぎてしも、さのみ久ひさしからず。たとひ五十いその後のち、又また五十いその齡れいを經へて、百年ねんいたに至いたるとも、猶なほ行ゆく先まきの月つき日ひ愈よく疾やくくして、程ほどなく盡つき人ひとと思おもひやられ侍はべる。幾いくばく程ほどなき殘のこれる齡よはひを樂たのしみてこそ、過すぐさまほしけれ。

愁うれひ苦くるしみてむなしく過すぎなんば、いと愚ぐなりや。としく〜に花はなは相あひ似にたれと、年とし々くに人ひとは同おなじからず老おいかさなれば一いつとせの内うちにも、やう〜衰おとろへ行き

て、今いま昔むかしに如ごとかず、後のちの今いまに如ごときことを知しりてかれてより悔くいながらん

事ことを思おもひ、時じつ日にちを惜おししみ、一日いちにちも徒いたらず可べからず。今日けふ暮くれて明日あすもあ

りとて頼たのむ可べからず。今日けふの日ひの内うちを日ひ々びに惜おしむ可べし。